

6. ネクタリン

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	I Cボルドー412	散布	-	-	
3	アンビルフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
M2	(水和硫黄) イオウフロアブル	散布	発病前～発病初期	-	
	コロナフロアブル	散布	-	-	
	サルファーゾル	散布	発病前～発病初期	-	
3	インダーフロアブル	散布	収穫前日まで	4回以内	
3	オーシャイン水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
3	オンリーワンフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
7	カナメフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
M1	クプロシールド	散布	-	-	
3	サンリット水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
3	スコア顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
11	ストロビードライフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
M5	ダコニール1000	散布	収穫前日まで	2回以内	
M3	(チウラム) チオノックフロアブル	散布	収穫30日前まで	5回以内	
	トレノックスフロアブル				
M9	デランフロアブル	散布	収穫14日前まで	2回以内	
11+7	ナリアWDG	散布	収穫前日まで	2回以内	
7	パレード15フロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
11	フrintフロアブル25	散布	収穫前日まで	2回以内	
7	フルーツセイバー	散布	収穫前日まで	3回以内	
M7	ベルコートフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
41	マイコシールド	散布	収穫28日前まで	5回以内	
2	ロブラール水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
M2	石灰硫黄合剤	散布	発芽前	-	落葉果樹

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	(アクリナトリン) アーデント水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
	アーデントフロアブル				
3	アグロスリン水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	(イミダクロプリド) アドマイヤー水和剤	散布	収穫14日前まで (但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	
	アドマイヤー顆粒水和剤				
16	アブロードフロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
4	(ジノテフラン) アルバリン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
	スタークル顆粒水溶剤				
29	ウララDF	散布	収穫7日前まで	2回以内	
28	エクシレルSE	散布	収穫前日まで	3回以内	
15	カスケード乳剤	散布	収穫21日前まで	2回以内	
1	ガットキラー乳剤	樹幹部及び主枝に散布	休眠期(落葉後～萌芽前)	3回以内	

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
20	カネマイトフロアブル	散布	収穫3日前まで	1回	
13	コテツフロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
9	コルト顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
6	コロマイト乳剤	散布	収穫7日前まで	1回	
-	コンフェューザーMM	デイスパンスーを対象作物の枝に挟み込み、または巻き付け設置する。	成虫発生初期～終期	-	果樹類
1	サイアノックス水和剤	散布	収穫21日前まで	2回以内	
28	サムコルフロアブル10	散布	収穫3日前まで	2回以内	
3	スカウトフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
-	スカシバコンL	デイスパンスーを対象作物の枝に巻き付け設置する。	成虫発生初期～終期	-	果樹類
5	スピノエースフロアブル	散布	収穫3日前まで	2回以内	
1	ダイアジノン水和剤34	散布	収穫21日前まで	3回以内	
23	ダニゲッターフロアブル	散布	収穫前日まで	1回	
25	ダニサラバフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
21	ダニトロンフロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
4	ダントツ水溶剤	散布	収穫3日前まで	3回以内	
5	(スピネトラム) ディアナWDG デリゲートWDG	散布	収穫前日まで	2回以内	
1	トラサイドA乳剤	樹幹及び主枝に十分散布する。	収穫後～発芽前(幼虫食入期)	3回以内	
15	ノーモルト乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
UNM	ハーベストオイル	散布	発芽前	-	
21	ハチハチフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	バリアード顆粒水和剤	散布	収穫3日前まで	2回以内	
10	バロックフロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
28	(フルベンジアミド) フェニックスフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
		樹幹部及び主枝に散布	開花期まで	1回	
	フェニックス顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
20	マイトコーネフロアブル	散布	収穫3日前まで	1回	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫3日前まで	3回以内	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

品種や気象条件により収穫時期が異なるので、薬剤の使用時期（収穫前日数）に注意する。
 農薬の使用回数は、前年の収穫後から本年の収穫までの期間の使用回数であるので注意する。
 ももとは農薬登録基準（使用時期、使用回数）が異なる場合があるので確認して使用すること。

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病虫害〕	注 意 事 項		
休眠 (落葉から 発芽前まで)		胴 枯 病	1. 胴枯病の発生園では被害枝を切り取り、又は患部を削り取って切り口に塗布剤を塗布する。		
発芽前	<p>水 (86 ℓ)</p> <p>石灰硫黄合剤 14 ℓ</p> <p>又は</p> <p>殺菌剤 チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス) 200 ml</p> <table border="1" data-bbox="359 1198 751 1294"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>300ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	300ℓ	越冬病虫害 主として 縮葉病 黒星病 せん孔細菌病 胴枯病 ハマキムシ類 コスカシバ キクイムシ類	<ol style="list-style-type: none"> 1. コスカシバの防除を前年の収穫後（秋期）に実施していない園では、被害部の樹脂を取り除き、発芽直前にガットキラール剤 100 倍液を寄生部の枝幹に散布する。 2. モモアカアブラムシの越冬卵ふ化後の防除には、発芽直前にハーベストオイル 50 倍液を散布する。
10a 当り 散布量	300ℓ				
開花 始め	<p>【せん孔細菌病防除対策】</p> <p>水</p> <p>I C ボルドー412 3.3 kg</p> <table border="1" data-bbox="359 1783 751 1879"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>300～350ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	300～350ℓ	せん孔細菌病 コスカシバ	<ol style="list-style-type: none"> 1. せん孔細菌病の発生園では必ず散布する。 2. コスカシバの防除を発芽前に実施しても虫糞排出が認められる園では、開花期までにフェニックスフロアブル 500 倍液を地際部から地上 1 m 位までの樹幹及び主枝に散布する。なお、使用回数は 1 回のため注意する。 3. コスカシバの交信かく乱剤スカシバコン L の設置適期は 4 月下旬である（別表－4 参照）。 4. フェニックスは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
10a 当り 散布量	300～350ℓ				

時期	散布薬剤と薬量（水 1000 当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病虫害〕	注 意 事 項		
<p>【せん孔細菌病防除対策】 伝染源となる春型枝病斑が目立ってくるので、この時期から 6 月まで園内を点検して剪除する。</p>					
<p>コンフェューザーMM（120 本／10 a）は、この時期から 5 月中下旬までに取り付ける（別表－4 参照）。 対象害虫：モモシンクイガ、ナシヒメシンクイ、リンゴコカクモンハマキ、モモハモグリガ</p>					
落花後	<p>せん孔細菌病防除剤 マイコシールド 66 g</p> <p>殺 虫 剤 (別表－3 による)</p> <table border="1" data-bbox="368 813 770 909"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>300～350ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	300～350ℓ	せん孔細菌病 アブラムシ類 モモハモグリガ ハマキムシ類 リンゴハダニ	<ol style="list-style-type: none"> 1. マイコシールドは薬剤耐性菌出現のおそれがあるので注意する。 2. アブラムシ類の発生が多く、マメコバチ等訪花昆虫の活動期間中の防除が必要な場合は、ウララDF4,000 倍液を散布する。 3. モモハモグリガ成虫の発生が多く、マメコバチ等訪花昆虫の活動期間中の防除が必要な場合は、サムコルフロアブル 10 の 5,000 倍液、I GR 剤のいずれかを散布する。 4. I GR 剤、サムコルは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
10a 当り 散布量	300～350ℓ				
落花 10 日後（5 月中旬）	<p>殺 菌 剤 チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス) 200 ml</p> <p>せん孔細菌病防除剤 マイコシールド 66 g</p> <p>殺 虫 剤 (別表－3 による)</p> <table border="1" data-bbox="360 1641 751 1738"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>300～400ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	300～400ℓ	せん孔細菌病 黒 星 病 カメムシ類 ウメシロカイガラムシ アブラムシ類 モモチョッキリ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 5 月中下旬は黒星病の感染最盛期にあるので降雨前散布を心がける。 2. チウラムにかえて水和硫黄剤（イオウ、コロナ、サルファーゾル）の 500 倍液を散布してもよい。 3. 水和硫黄剤は高温時に散布すると薬害の発生するおそれがある。 4. マイコシールドは薬剤耐性菌出現のおそれがあるので注意する。 5. ウメシロカイガラムシの寄生が多い場合は、第 1 世代ふ化幼虫の出現初期にあたるこの時期にアブロードフロアブル 1,000 倍液を散布する。 6. モモチョッキリの発生が多い場合は、モスピラン顆粒水溶剤 4,000 倍液を散布する。 7. モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
10a 当り 散布量	300～400ℓ				

時期	散布薬剤と薬量（水 1000 当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病虫害〕	注 意 事 項		
5 月 下 旬	<p>殺菌剤 チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス) 200 mℓ</p> <table border="1" data-bbox="359 548 751 645"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>300～400ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	300～400ℓ	<p>せん孔細菌病 黒星病 カメムシ類 ウメシロカイガラムシ アブラムシ類 モモチョッキリ</p>	<ol style="list-style-type: none"> チウラムにかえて水和硫黄剤（イオウ、コロナ、サルファール）の 500 倍液を散布してもよい。 水和硫黄剤は高温時に散布すると薬害の発生するおそれがある。 せん孔細菌病の多発園では、デランフロアブル 600 倍液、クプロシールド 1,000 倍液（炭酸カルシウム水和剤 100 倍加用）のいずれかを散布する。 クプロシールドは開花期以降に散布すると薬害が発生するおそれがあるので、炭酸カルシウム水和剤を必ず加用する。また、弱樹勢樹では基部葉が赤変、落葉する場合があるため注意する。 デランはアプローチ B I、ニーズを加用すると薬害を生じるので加用しない。 マイコシールドは薬剤耐性菌出現のおそれがあるので注意する。
10a 当り 散布量	300～400ℓ				
6 月 上 旬	<p>殺菌剤 チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス) 200 mℓ</p> <p>殺虫剤 (別表-3 による)</p> <table border="1" data-bbox="359 1489 751 1585"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450～500ℓ	<p>せん孔細菌病 黒星病 モモハモグリガ クワコナカイガラムシ カメムシ類</p>	<ol style="list-style-type: none"> せん孔細菌病の多発園では、この時期から 7 月上旬までチウラムフロアブル（チオノック、トレノックス）500 倍液、デランフロアブル 600 倍液、マイコシールド 1,500 倍液のいずれかを散布する。なお、早生種では使用時期に注意する。 チウラムは早生種では使用時期に注意する。 モモハモグリガの発生がみられる園では、食入防止効果のある剤を散布する。
10a 当り 散布量	450～500ℓ				

時期	散布薬剤と薬量（水 1000 当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項																
6 月 中 ・ 下 旬	<p>殺菌剤 ベルコートフロアブル 50 ml</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <p>殺ダニ剤</p> <table border="1" data-bbox="343 660 805 907"> <tr> <td>カネマイトフロアブル (1回)</td> <td>66 ml</td> </tr> <tr> <td>コロマイト乳剤 (1回)</td> <td>100 ml</td> </tr> <tr> <td>ダニゲッターフロアブル (1回)</td> <td>50 ml</td> </tr> <tr> <td>ダニサラバフロアブル (2回)</td> <td>100 ml</td> </tr> <tr> <td>ダニトロンフロアブル (2回)</td> <td>50 ml</td> </tr> <tr> <td>バロックフロアブル (2回)</td> <td>50 ml</td> </tr> <tr> <td>マイトコーネフロアブル (1回)</td> <td>100 ml</td> </tr> </table> <p>のいずれか</p> <p>() は登録の使用回数 (前年収穫後から収穫まで)</p> <table border="1" data-bbox="359 1131 750 1220"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450~500ℓ</td> </tr> </table>	カネマイトフロアブル (1回)	66 ml	コロマイト乳剤 (1回)	100 ml	ダニゲッターフロアブル (1回)	50 ml	ダニサラバフロアブル (2回)	100 ml	ダニトロンフロアブル (2回)	50 ml	バロックフロアブル (2回)	50 ml	マイトコーネフロアブル (1回)	100 ml	10a 当り 散布量	450~500ℓ	<p>せん孔細菌病 黒 星 病 ホモプシス腐敗病 灰 星 病 炭 疽 病 疫 病 モノゴマダラノメイガ ハマキムシ類 ハダニ類 カイガラムシ類 シンクイムシ類 アブラムシ類 カメムシ類</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. ハマキムシ類の防除時期である。 2. ハダニ類は初期防除を心がける。左記の殺ダニ剤の使用方法については、りんごの項【別表-3】を参照する。 3. この時期からシンクイムシ類の発生が多くなる。モモシンクイガは6月下旬頃からの防除が必要である。 4. ツノアオカメムシが付近の雑木林（クヌギ、コナラ、ケヤキなど）に多い場合は、7月に入ると成虫が園内に飛来し加害するので注意する。 5. カネマイトは、交配から交配30日後までのなしにかかると葉に薬害を生じるので注意する。 6. ダニゲッターは他作物に薬害を生じるおそれがあるので注意する（総括注意6参照）。 7. コロマイト、バロックは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 8. ダニトロンは蚕毒と魚毒に注意する。
カネマイトフロアブル (1回)	66 ml																		
コロマイト乳剤 (1回)	100 ml																		
ダニゲッターフロアブル (1回)	50 ml																		
ダニサラバフロアブル (2回)	100 ml																		
ダニトロンフロアブル (2回)	50 ml																		
バロックフロアブル (2回)	50 ml																		
マイトコーネフロアブル (1回)	100 ml																		
10a 当り 散布量	450~500ℓ																		
<p>主要な早生種・中生種の収穫期を迎えるので、薬剤の使用時期（収穫前日数）に注意し、防除する。</p>																			

時期	散布薬剤と薬量（水 1000 当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項		
7 月 上 旬	<p>殺菌剤 ダコニール 1000 100 ml</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <table border="1" data-bbox="359 616 751 712"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450～500ℓ	<p>灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 疫 病 せん孔細菌病 モモハモグリガ シンクイムシ類 モモノゴマダラノメイガ アブラムシ類 ハダニ類</p>	<ol style="list-style-type: none"> この回から灰星病、モモハモグリガ、シンクイムシ類などの重要な防除時期となるので丁寧に散布する。 ダコニールは除袋直後に散布すると果実に薬害を生じることがある。 早生種では収穫 20 日前頃からダコニールにかえて、別表-2 の灰星病防除薬剤を散布する。 モモハモグリガ成虫の発生が多い場合は、アーデント水和剤、アグロスリン水和剤の 1,000 倍液、アドマイヤー水和剤、ジノテフラン顆粒水溶剤（アルバリン、スタークル）、スカウトフロアブル、ハチハチフロアブル、ノーモルト乳剤の 2,000 倍液、カスケード乳剤、ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤の 4,000 倍液、エクシレル S E、サムコルフロアブル 10 の 5,000 倍液、アドマイヤー顆粒水和剤 10,000 倍液のいずれかを散布する。 合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒に、IGR 剤、アドマイヤー、アルバリン、エクシレル、サムコル、スタークル、ダントツ、ハチハチ、モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
10a 当り 散布量	450～500ℓ				
7 月 中 旬	<p>殺菌剤 ダコニール 1000 100 ml</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <table border="1" data-bbox="359 1706 751 1803"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450～500ℓ	<p>灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 せん孔細菌病 シンクイムシ類 クワコナカイガラムシ ハダニ類</p>	<ol style="list-style-type: none"> 灰星病の多発が予想される場合は、中生種にも別表-2 のいずれかの剤を散布する。 これ以降随時、灰星病、炭疽病の発病果は伝染源となるので、見つけ次第摘除し、土中に埋める。 ハダニ類の早期多発が予想される場合には、次回に記載の殺ダニ剤を早めに散布する。なお、殺ダニ剤の使用方法については、りんごの項【別表-3】を参照する。
10a 当り 散布量	450～500ℓ				

時期	散布薬剤と薬量（水 1000 当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項		
7 月 下 旬	<p>灰星病防除薬剤 (別表-2による)</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <p>殺ダニ剤 〔カネマイトフロアブル(1回) 66 ml コロマイト乳剤(1回) 100 ml ダニゲッターフロアブル(1回) 50 ml ダニサラバフロアブル(2回) 100 ml ダニトロンフロアブル(2回) 50 ml バロックフロアブル(2回) 50 ml マイトコーネフロアブル(1回) 100 ml のいずれか〕</p> <p>()は登録の使用回数 (前年収穫後から収穫まで)</p> <table border="1" data-bbox="359 1032 751 1128"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450~500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450~500ℓ	<p>灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 シンクイムシ類 ハダニ類 ハマキムシ類 ミカンキロアザミウマ モモハモグリガ クワコナカイガラムシ 吸 蛾 類</p>	<ol style="list-style-type: none"> 炭疽病の発生がみられる場合は、フリントフロアブル 25 の 2,000 倍液を散布する。 ハマキムシ類の発生が多い場合は、果実に接している葉を早めに摘み取る。 ミカンキロアザミウマの発生園では、果実の着色期に防除する。 果実の成熟につれて吸蛾類の被害が増加するので、夜間の捕殺に努める。電灯照明による防除法は総括注意5を参照する。 左記の殺ダニ剤の使用方法については、りんごの項【別表-3】を参照する。 ダニゲッターは他作物に薬害を生じるおそれがあるので注意する（総括注意6参照）。 コロマイト、バロックは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 ダニトロンは蚕毒と魚毒に注意する。
10a 当り 散布量	450~500ℓ				
8 月 上 旬	<p>灰星病防除薬剤 (別表-2による)</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <table border="1" data-bbox="359 1561 751 1657"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450~500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450~500ℓ	<p>灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 シンクイムシ類 モモハモグリガ クワコナカイガラムシ ミカンキロアザミウマ ハダニ類 ハマキムシ類 吸 蛾 類</p>	<ol style="list-style-type: none"> 有袋栽培ではシンクイムシ類の食入やミカンキロアザミウマの吸汁を防ぐため、除袋後すみやかに防除する。
10a 当り 散布量	450~500ℓ				

時期	散布薬剤と薬量（水 1000当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項						
8 月 中 旬	灰星病防除薬剤 （別表－2による） 殺 虫 剤 （別表－3による） <table border="1" data-bbox="359 616 751 712"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450～500ℓ	灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 シンクイムシ類 モモハモグリガ モモノゴマダラノメイガ ハ ダ ニ 類 カ メ ム シ 類 吸 蛾 類	1. 晩生種では8月下旬にも別表－2の灰星病防除薬剤及び、別表－3のシンクイムシ類の防除薬剤を散布する。 2. 8月にモモハモグリガ成虫の発生が多い場合は、9月上旬にアーデント水和剤、アグロスリン水和剤の1,000倍液、ジノテフラン顆粒水溶剤（アルバリン、スタークル）、スカウトフロアブル、ノーモルト乳剤の2,000倍液、カスケード乳剤、ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤の4,000倍液のいずれかを散布する。収穫期に近い品種では、使用時期に注意する。 3. 合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒に、IGR剤、アルバリン、スタークル、ダントツ、モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。				
10a 当り 散布量	450～500ℓ								
【コスカシバ防除対策】 1. コスカシバ発生園では、幼虫の食入防止を狙って成虫発生盛期（8月中下旬～9月中旬頃）にフェニックスフロアブル4,000倍液を枝幹部にも十分量かかるよう丁寧に散布する。なお、この防除を実施しなかった場合、またはこの防除を実施しても虫糞排出が認められる場合は、必ず収穫後～発芽前の防除を実施する。 2. フェニックスは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。									
農薬の使用回数の注意 使用回数は、収穫後から翌年の収穫までの期間の使用回数であるので注意する。									
9 月 中 ・ 下 旬 （ 収 穫 後 ） 落 葉 後	<table border="1" data-bbox="359 1473 751 1570"> <tr> <td>水</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ICボルドー412</td> <td>3.3 kg</td> </tr> </table> <table border="1" data-bbox="359 1637 751 1733"> <tr> <td>10a 当たり 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	水		ICボルドー412	3.3 kg	10a 当たり 散布量	450～500ℓ	せん孔細菌病 コスカシバ モモハモグリガ	1. せん孔細菌病発生園では左記の薬剤を9月中旬頃から2週間間隔で2～3回散布する。 2. コスカシバの虫糞排出が認められる園では、収穫後（10月頃）にトラサイドA乳剤200倍液を樹幹及び主枝に散布する。 3. トラサイドは魚毒に注意する。
水									
ICボルドー412	3.3 kg								
10a 当たり 散布量	450～500ℓ								

【別表－1】殺菌剤の適用病害に対する使用方法及び効果

- ・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和6年11月30日現在）
- ・使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、薬剤に含まれる成分毎に総使用回数が別途決められているので、それを超えないように注意する。

薬剤の系統	薬剤名	FRACコード	（収穫前日数） 使用基準	使用回数（以内）	希釈倍数（倍）	対象病害に対する効果						注意事項該当番号
						縮葉病 （休眠期）	せん孔細菌病	黒星病	灰星病	ホモブシス 腐敗病	炭疽病	
無機硫黄剤	石灰硫黄合剤	M2	発芽前	－	7	○*						4
	イオウフロアブル	M2	発芽前～ 発病初期	－	500			○*				
	サルファーゾル	M2	発芽前～ 発病初期	－	500			○*				
	コロナフロアブル	M2	－	－	500			○*				
有機硫黄剤	チオノックフロアブル トレノックスフロアブル	M3	30日	5	500	○*	○*	○	○			3,12
	デランフロアブル	M9	14日	2	600	(1,000)	○*	○	○	○		5,12
無機銅剤	ICボルドー412	M1	－	－	30	○	○*					9
	クプロシールド	M1	－	－	1,000		○*					6,7, 8
抗生物質剤	マイコシールド	41	28日	5	1,500		○*					1,10
QoI剤	フリントフロアブル 25	11	前日	2	2,000			○	○	○	○*	2,11

【効果凡例】 ○*：効果ある（対象病害に普及済） ○：効果ある（対象病害に未普及）

【注意事項】（別表－1）

1. マイコシールド（FRACコード41）は薬剤耐性菌の出現を回避するため、過度の連用、多数回使用は行わない。
2. フリントはQoI剤（FRACコード11）である。薬剤耐性菌の出現を防ぐため、連用はさけ、年2回以内の使用に留める。
3. チオノック、トレノックスは有効成分、分量が同一である。
4. 石灰硫黄合剤は皮膚に刺激があるので注意する。
5. デランは人によってかぶれることがあるので注意する。
6. クプロシールドは葉に薬害を生じることがあるので炭酸カルシウム水和剤を必ず加用する。また、6月以降は薬害が生じやすくなるので使用しない。弱樹勢樹では基部葉が赤変し、重度なものは落葉する場合がありますため注意する。
7. クプロシールドは石灰硫黄合剤等アルカリ性薬剤との混用はさける。
8. クプロシールドはマイコシールドとの混用により凝集が生じる場合がありますため注意する。
9. ICボルドー412は、開花初めと9月中旬～10月上旬以外で使用で薬害を生じるので使用時期を厳守する。
10. マイコシールドの散布によりクロロシス（黄化現象）を生じることがある（作物の種類、環境などにより差があり、高温多湿時におきやすい）。
11. フリントは6月上旬までの日本なし、袋掛け直前の西洋なし、おうとうの未展開葉、いちごにかかると薬害を生じることがある。
12. チオノック、トレノックスは蚕毒と魚毒が、デランは魚毒が強いので注意する。

【別表－２】 灰星病防除薬剤の使用方法及び効果

- ・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和6年11月30日現在）
- ・使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、薬剤に含まれる成分毎に総使用回数が別途決められているので、それを超えないように注意する。

薬剤の系統	薬剤名	FRACコード	使用基準 (収穫前日数)	使用回数(以内)	希釈倍数(倍)	対象病害に対する効果				注該 意当 事番 項号
						灰星病	黒星病	ホモブシス 腐敗病	炭疽病	
ジカルボキシミド系	ロブラール水和剤	2	前日	3	1,500	○*				
DMI剤	アンビルフロアブル	3	前日	3	1,000	○*	○			1
	インダーフロアブル	3	前日	4	5,000	○*	○			1
	オーシャイン水和剤	3	前日	3	2,000	○*	○	○		1,4
	オンリーワンフロアブル	3	前日	3	2,000	○*	○	○	○	1,6
	サンリット水和剤	3	7日	3	2,000	○*				1
	スコア顆粒水和剤	3	前日	2	2,000	○*	○			1,7
SDHI剤	カナメフロアブル	7	前日	3	4,000	○*				1,9
	パレード15フロアブル	7	前日	2	2,000	○*	○			1
	フルーツセイバー	7	前日	3	2,000	○*	○			1
TPN剤	ダコニール1000	M5	前日	2	1,000	○*	○			2,9
QoI剤 及びその混合剤	ストロビードライフロアブル	11	前日	3	2,000	○*	○			1,3
	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	前日	3	3,000	○*	○	○		1
	ナリアWDG	11+7	前日	2	2,000	○*	○	○	○	1,8
その他	ベルコートフロアブル	M7	前日	2	2,000	○*	○	○*		5

【効果凡例】 ○*：効果ある（対象病害に普及済） ○：効果ある（対象病害に未普及）

【注意事項】（別表－２）

1. 薬剤耐性灰星病菌の出現防止のため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。特にDMI剤（FRACコード3）、SDHI剤（FRACコード7）、QoI剤（FRACコード11）（いずれも混合剤を含む）は年2回以内の使用にとどめる。
2. ダコニールは除袋直後に散布すると果実に日焼け状の薬害を生じることがある。
3. ストロビーは開花期以降のおうとうに薬害を生じることがある。
4. オーシャインはウリ科（きゅうり、メロンなど）に薬害を生じることがある。
5. ベルコートは芽出し2週間後から落花25日後頃までのりんご及び、西洋なし「ル・レクチェ」、かき「西村早生」、メロン、ばらなどに薬害を生じることがある。
6. オンリーワンははくさい、だいこんに薬害を生じることがある。
7. スコアは西洋なし「ル・レクチェ」果実に薬斑を生じることがある。
8. ナリアは、ぶどう「ピオーネ」、「コンコード」、「藤稔」、「サニールージュ」、「シャルドネ」、西洋なし「ル・レクチェ」に薬害を生じることがある。
9. カナメは蚕毒が、ダコニールは魚毒が強いので注意する。

【別表－3】殺虫剤の適用害虫に対する使用方法及び効果

- ・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和6年11月30日現在）
- ・使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、薬剤に含まれる成分毎に総使用回数が別途決められているので、それを超えないように注意する。

薬剤の系統	殺虫剤名	IRACコード	使用回数(以内)	希釈倍数(倍)	対象害虫に対する効果										注意事項該当番号		
					シンクイムシ類	ハマキムシ類	モモハモグリガ	アブラムシ類	カイガラムシ類	クワコナカイガラムシ	ウメシロカイガラムシ	カメムシ類	コスカシバ	ミカンキイロアザミウマ			
有機リン剤	サイアノックス水和剤	1	21日	2	1,000	○*	○	△	△	○							4
	ダイアジノン水和剤 34	1	21日	3	1,000	○*	○		△		○ (若齢幼虫)						4
合成ピレスロイド剤	アーデント水和剤	3	前日	3	1,000	○		○*	○				○		○*	(注2)	1, 2, 3
	アーデントフロアブル	3	前日	3	2,000	○			○				○		○*	(注2)	2, 3
	アグロスリン水和剤	3	前日	2	1,000	○		○*	○				○				1, 2, 3
	スカウトフロアブル	3	前日	3	2,000	○		○*	○*								1, 2, 3
IGR剤	アブロードフロアブル	16	7日	2	1,000					○*	(幼虫)						9
	カスケード乳剤	15	21日	2	4,000		○*	○*									1, 3, 9
	ノーモルト乳剤	15	前日	2	2,000	△		○*									1, 3, 9
ネオニコチノイド剤	アドマイヤー水和剤	4	14日 (注1)	2	2,000			○*	○*								1, 3
	アドマイヤー顆粒水和剤	4	14日 (注1)	2	10,000			○*	○*				○				1, 3
	アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	4	前日	3	2,000	○		○*	○*				○				1, 3, 7
	ダントツ水溶剤	4	3日	3	4,000	○		○*	○*				○				1, 3
	バリアード顆粒水和剤	4	3日	2	4,000	○		○	○*								3
	モスピラン顆粒水溶剤	4	3日	3	4,000	○*		○*	○*				○		○	(注2)	1, 3, 6
ジアミド剤	エクシレルSE	28	前日	3	5,000	○	○	○*									1, 3, 5
	サムコルフロアブル 10	28	3日	2	5,000	○	○	○*						○			1, 3, 5, 9
	フェニックス顆粒水和剤	28	前日	2	4,000	○	○	○*									1, 3, 5, 9
	フェニックスフロアブル	28	前日	2	4,000	○	○	○						○*			3, 5, 9
その他	ウララDF	29	7日	2	4,000				○*								9
	コテツフロアブル	13	7日	2	2,000			○				○			○*		4
	コルト顆粒水和剤	9	前日	3	4,000				○*								5
	スピノエースフロアブル	5	3日	2	6,000			○							○*		3
	ディアナWDG デリゲートWDG	5	前日	2	10,000	○	○	○							○*	(注2)	3, 8
	ハチハチフロアブル	21	前日	2	2,000	○		○*	○*								1, 3, 4

【使用基準】 (注1) : 但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く

【効果凡例】 ○* : 効果ある(対象害虫に普及済) ○ : 効果ある(対象害虫に未普及) △ : 効果劣る

(注2) : 適用害虫はアザミウマ類

() : カッコ内の希釈倍数で対象害虫に登録がある

【注意事項】（別表－3）

1. モモハモグリガに対し食入防止効果が高い薬剤である。
2. 合成ピレスロイド剤は人によって、くしゃみやかぶれが出ることがあるので注意する。
3. 合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒が、I GR剤（アブロードを除く）は蚕毒が極めて強く、指定地域があるので、これ以外では使用しない。ネオニコチノイド剤、エクシレル、サムコル、スピノエース、ディアナ、デリゲート、ハチハチ、フェニックスは蚕毒が特に強いので桑園付近では使用しない（特別指導事項参照）。
4. コテツ、サイアノックス、ダイアジノンに蚕毒が、ハチハチは魚毒が強いので注意する。
5. エクシレル、コルト、サムコル、フェニックスは水産動物（特に甲殻類）に影響が強いため注意する。
6. モスピランは施設栽培で葉に薬害を生じることがある。
7. アルバリンとスタークルは有効成分、分量が同一である。
8. ディアナとデリゲートは有効成分、分量が同一である。
9. 訪花昆虫に対し、I GR剤、ウララ、サムコル、フェニックスは影響が少ない。訪花昆虫が活動中は、これら以外の薬剤を使用しない。

【別表－4】 交信かく乱剤の設置時期・量

交信かく乱剤は殺虫効果がなく、交尾を阻害し次世代の増殖を抑制するものである。交信かく乱剤のみで対象害虫を防除することは不可能であるため、必ず殺虫剤による補完防除を行う。なお、複数の対象害虫に対して使用する場合、殺虫剤の散布回数削減が可能である。

交信かく乱剤の種類と設置方法

使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和6年11月30日現在）

薬剤名	適用害虫名	設置時期・量	設置方法
コンフューザーMM	モモシクイガ ナシヒメシクイ リンゴコカクモンハマキ モモハモグリガ	落花期から5月中下旬 まで（120本/10a）	目どおりの高さに設置 する。
スカシバコンL	コスカシバ	4月下旬 （50本/10a）	目どおりの高さの枝に 巻きつける。

注）フェロモントラップを設置し、交信かく乱の状況を把握することが望ましい。
ナシヒメシクイの発生園では、コンフューザーMMを早めに設置する。

[コンフューザーMM設置園におけるモモハモグリガの発生予察法]

コンフューザーMM設置園では、従来のフェロモントラップによりモモハモグリガ成虫の発生時期を把握できないが、以下の方法により把握し防除適期を判断することができる。

1. トラップは、一般的な2方向開口型の屋根と粘着板を用いる。
2. 誘引源として、コンフューザーMM5本を束ねずに、間隔をあけて屋根の内側に取り付ける。
3. 誘引源のコンフューザーMMは、調査が必要な5月中旬～9月中旬までの4か月間、交換することなく使用できる。
4. 成虫発生始期から盛期の間、食入防止効果の高い殺虫剤を散布する。

【総括注意】

1. 品種の混植園等では薬剤の使用時期（収穫前日数）に注意して薬剤を選定し、薬液の飛散に注意して防除にあたる。
2. 胴枯病は、凍害などで誘発される。発病予防のため、冬期間主幹部にワラなどを巻いたり、枝の配置を考えて夏季の日よけを作る。
3. 灰星病発病果は見つけ次第、除去して土中に埋める。また冬季剪定時に枯れ枝やミイラ果の付着している枝は剪定して焼却する。
4. コウモリガは6月以降に食入が多くなる。早期発見に努め、被害を認めた時は虫孔に針金を差し込み刺殺する。また、株元、園周辺の雑草は常に刈り取っておく。
5. 吸蛾類防除に黄色蛍光灯の夜間照明が有効である。被害防止が期待できる照度は果実面で1ルクスとされている。設置方法、設置数は各器材の使用法に従う。
6. **ダニゲッター**は、以下の薬害のおそれがあるので、周辺作物へ飛散しないよう十分注意する。
 - (1) **なし、おうとう**にも適用登録があるが、時期（主に新梢伸長期）、品種、有機リン剤との同時散布や近接散布で、新梢（伸長中の新梢先端部）に薬害を生じるおそれがある。
 - (2) **開花期の水稻**にかかった場合、不稔などを生じるおそれがある。
 - (3) **ぶどう（新芽新葉）、キャベツ、はくさい、こまつな、ねぎ、みょうが、ばら、りんどう、シンビジウム**等のラン類に対して薬害を生じるおそれがある。